

朝鮮通信使記録

対馬宗家文書・第Ⅰ期

監修

田代和生

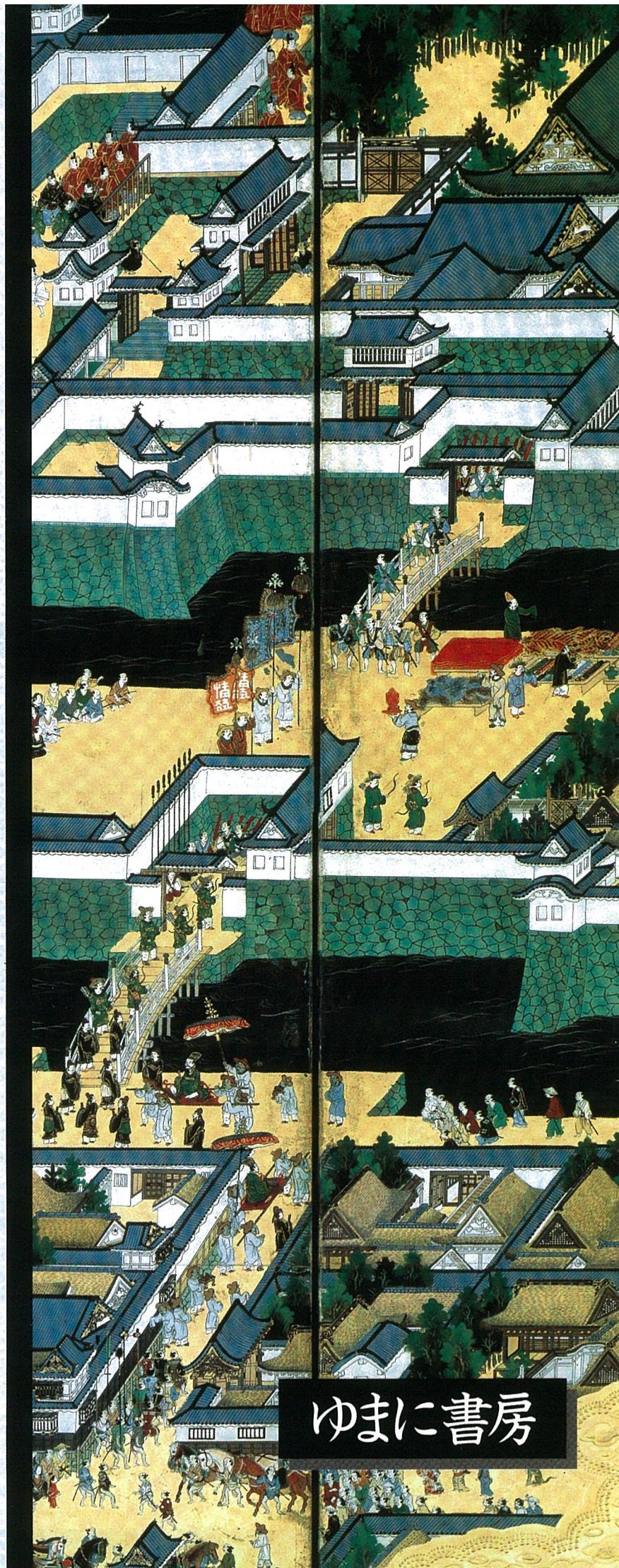
(慶應義塾大学名誉教授)

李 薫

(元大韓民国國史編纂委員會研究委員
現東北亞歴史財団首席研究員)

16mm ポジティイブロール
全137リール
+別冊3(解題・目録)

大韓民国國史編纂委員會所蔵史料を初収録。近世日朝交流史の根本史料で、
国内外に散在する宗家の外交記録の完全版がついに実現。



推薦します



待望の史料群を手許に

東京大学名誉教授 故

田中 健夫

対馬藩宗家の史料は、江戸時代の大名家の史料のなかできわめて多彩で豊富な内容をもつており、しかもよく整備されている。とくに対馬藩が朝鮮との交流に独占的にたずさわってきた関係から、その厖大な史料群は日朝関係を解明するためには不可欠のものとして注目された。ただ宗家史料は、明治以後さまざまの経緯を経て分散し、現在は韓国国史編纂委員会・対馬歴史民俗資料館・東京大学史料編纂所・国立国会図書館・慶應義塾大学等に所蔵され、少數の研究者以外には十分に利用研究されることがなかつた。今回、多年日朝関係史を専攻してきた慶應義塾大学の田代和生教授が監修して、これ等に東京国立博物館所蔵の史料等を加え、テーマごとにマイクロフィルムに収録するという。これからは、韓国にゆかねば調査できなかつたよくな、閲覧に不便だつた貴重な史料を、手許において見ることができるのである。積年の渴望建立やす壯舉であり、福音である。日韓両国の研究者による縦横の活用とその研究成果を期待したい。



推薦辞

元大韓民國國史編纂委員會委員長

ソウル大學校名譽教授

李 元淳

近世日韓関係史において、対馬はユニークな歴史的役割を占めています。そのため、対馬藩の記録である宗家文書は日韓交流史研究の基本史料として学問的に注目されてきました。ところが、現在、宗家記録は対馬藩の本舞台である対馬と江戸藩邸があつた東京のいくつかの古文書関係機関とともに、我が韓国の歴史史料機関である国史編纂委員会等、日韓両国のいくつかの機関に分散秘蔵されています。研究者の利用が至難で何らかの方法で研究の便がはかられる様熱望されました。

此度「ゆまに書房」が以上諸機関に秘蔵されている「宗家記録と日韓交渉史料」を総合し、マイクロ・フィルムで史研究者にとって一大朗報と云えましょう。この史料が公刊される事によって日韓交流史研究が促進される事を信じ、又新しき時代の日韓関係創造に寄与し得る学問の糧になると思料し、同社の勇断に敬意を表しながら敢えて推薦する次第であります。



現代的意義を評価 須之部量三

元韓國駐在日本大使 故

もう随分以前のことになるが、曾つて、ソウル特別市に隣接する果川市所在の韓国国史編纂委員会を訪問したことがある。その時のわれわれ一行の中に田代和生先生がおられ、同委員会に所蔵されている対馬文書の現物を手にして、その史料としての意義をうかがうことが出来た。惧らく、その頃から既に、田代先生は日本内外に分散した宗家記録をマイクロフィルム化する構想を持っておられたのである。その後の、日韓文化交流に関する国際会議の際にも、田代先生はその種の発言をしておられた。

昨今、日本と韓国との間の歴史認識についての議論が高まっている。大いに歓迎すべきことであるが、歴史研究を進めるためには、何よりも、日韓双方における貴重な一次資料が広く利用し易くなることが肝要である。

今回のゆまに書房の企画の持つ現代的意義を評価して、これを江湖に推奨するものである。

監修のことば



慶應義塾大学名誉教授

田代 和生

対馬藩宗家の文書は、内容が国際色に富み、かつその量が総点数、十数万点といわれるほど厖大なことで知られている。とくに宗家の行つた朝鮮国との外交や貿易が、対馬を「鎖国」時代にあっても東アジア国際社会に開かれた窓口のひとつにした。ところが藩政時代が終わると、これらの特徴が裏目に出了。たとえば戦前は、日本の朝鮮半島における植民地政策のもと、六万点以上の宗家文書が朝鮮総督府によって保管することができず、最近判明した分を加えると、東京だけで五カ所、対馬を含むと合計六カ所に分割された原因になつた。もともと宗家文書は、対馬藩邸・朝鮮釜山の倭館・江戸の対馬藩邸でつけられ、伝えられてきたものである。記録類は長い年月とともに互いに出入りを繰り返し、他所の写しや控などが作成され、別所に移されたものも多い。このため、宗家文書のいすれもが相互に関連したものであることはいうまでもない。

貴重な宗家文書の存在は、日本のみならず、海外にも知られるようになつた。とにかく最近は、韓国の歴史学者が宗家文書に注目し、日本の古文書にとり組んでおられる。そうした方々のためにも、いつかこれらの文書が整理され、ひとところで見られるようになって欲しい。それが、この研究にたずさわってきた者が一様に抱く、積年の「夢」であった。

この入手困難な一級史料を、手もとにおいて縦横に活用できるよう、このほど東京に保管されている宗家文書から、順次マイクロフィルム化という形で刊行に踏み切ることになった。それも、慶應義塾図書館本は通信使記録、国立国会図書館本は倭館記録、東京大学史料編纂所本は江戸藩邸記録と、それぞれの保管所の核となる記録を選び、さらに欠本となつてゐる部分については、韓国国史編纂委員会や東京国立博物館などのご協力を得て補充をはかるなど、できるだけ完全なシリーズ本の復元をめざしている。

宗家文書は、アジアの隣国と最も友好な時代を築いたかつての日本の姿を、ありますことなく語ってくれる。それは単なる歴史の一象ではなく、これから二十一世紀の国際社会を生きるわれわれにとって、学ぶべき現代的課題でもある。できるだけ広く、国内外の多くの人々がこの文書に接することができるよう、いまここにマイクロフィルム版『対馬宗家文書』を世に送り出す次第である。



李 薫

元大韓民國國史編纂委員會研究委員／現東北亞歷史財團首席研究員

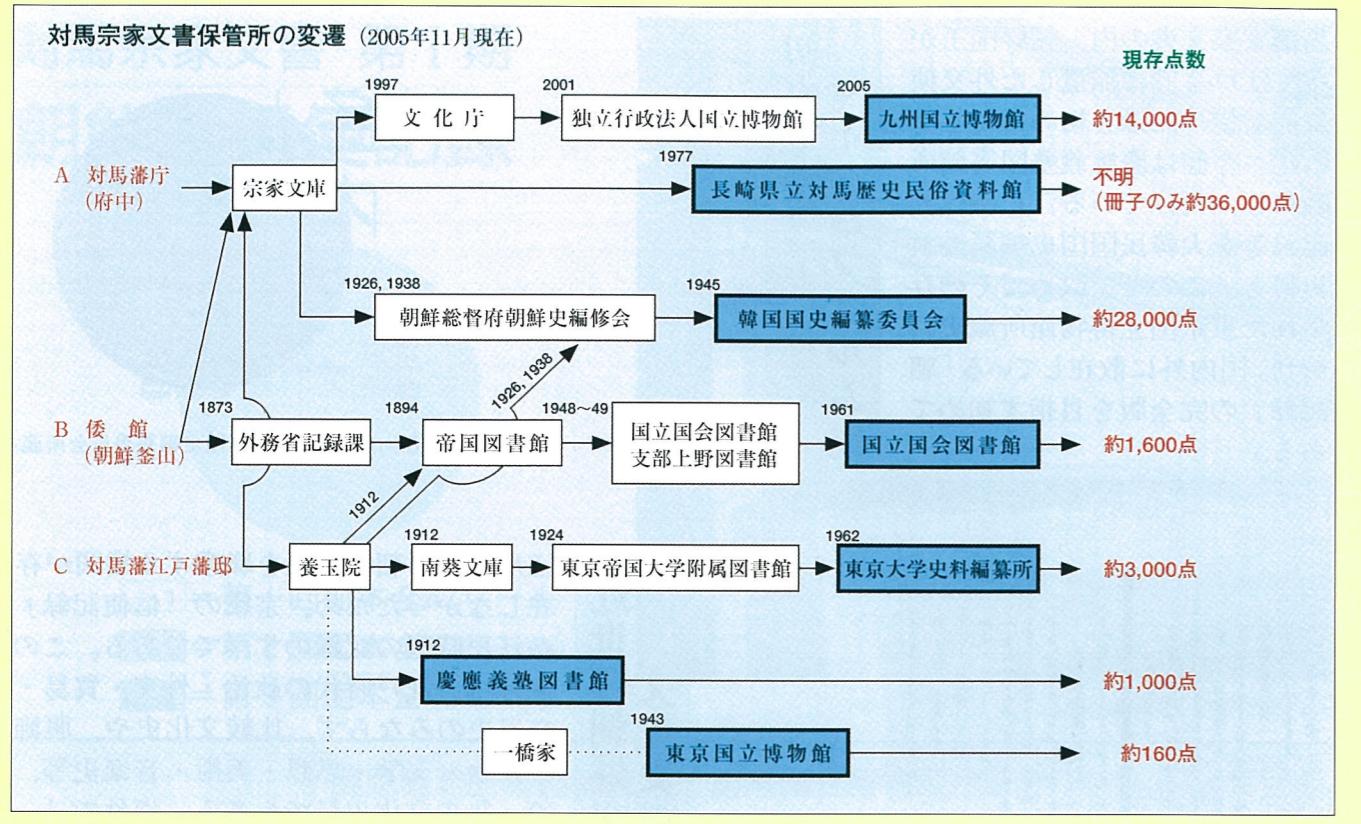
近世の日朝関係において対馬はきわめて独特な位置にあつた。両国の辺境にある小さな島でありますながら日朝の間接的な通交のなかで外交・貿易を独占的に行つていたために、国際交流のうえでは中央にあつたともいえる。その結果、対馬の宗家はこの交流に関する厖大な文書群を残すことができ、宗家文書は藩政文書とはいえ、外交文書をも含む多彩で国際色の豊かな文書として、近世の日朝関係を解明できる基礎史料として注目されてきた。

ところで、明治政府以来、対馬の宗家文書は日本の朝鮮侵奪過程で朝鮮総督府が購入した文書群が韓国国史編纂委員会に伝えられるようになるなど、いろいろな経緯をへていまは韓国と日本の7個所に分散・所蔵されている。これら文書のなかにはもともと1セットのはずのものが分散されたものもあれば、同じ性格の記録でも様々な段階の清書本や写本が各機関に分散しているものもある。しかし、このような特徴は結局文書の閲覧と利用の不便を意味するだけであつた。

この度、ゆまに書房が『信使記録』をマイクロフィルムの形態ではあるがひとところにまとめる企画をたててゐるが、前近代善隣友好の象徴ともいえる『信使記録』は宗家文書のなかでも分散の度合が高い方である。国史編纂委員会は所蔵資料のなかでもっとも核心的で大事にしている『信使記録』を提供し、閲覧の便宜をはかることにした。慶長の回答兼刷還使の派遣の時から幕末の大坂易地聘礼計画にいたるまで、江戸と対馬藩邸の各係でつけられた様々な種類の記録を網羅し、また日本の他機関に欠本になつているものは可能な限り補充することによって、「通信使」に関するほぼ完決版を作るように努めた。

ゆまに書房の『信使記録』刊行を契機に、近世の日朝交流史の研究が一層活発になり、そのなかから新しい21世紀の日韓関係構築に寄与しうる課題をみつけだすこと願いたい。

対馬・宗家文書の由来と 保管所の変遷



閲覧困難な近世日朝交流の超一級史料!!

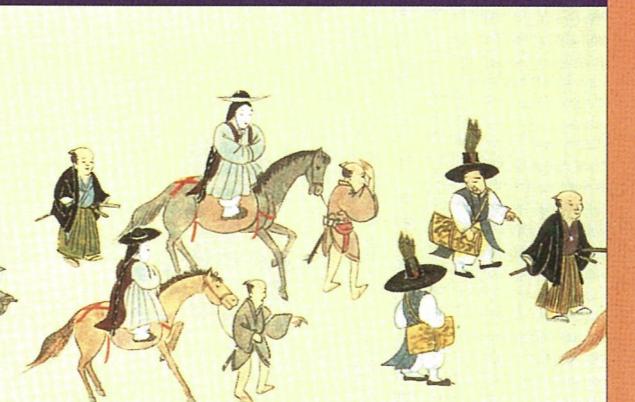


大韓民国国史編纂委員会所蔵「信使記録」

対馬藩宗家に伝わる古記録・古文書の類は、江戸時代の諸大名のなかでも、質・量ともに特筆すべきものがある。いわゆる「鎖国」といわれる時代、日本は朝鮮国と対等な外交関係を樹立していった。徳川幕府は、この対朝鮮関係にかかる煩雑な実務を対馬藩に一任しており、このため『宗家文書』は、当時としては珍しい国際色豊かな内容となつた。しかも国際関係というものは、口約束だけではなく、文字にして記録にとどめておく必要がある。対馬藩では、実務をおこなつた釜山の倭館において、記録の作成と保管を義務づけていた。かくして総点数、数十万といわれる厖大な記録類が誕生したのである。

『宗家文書』は、おもに1対馬藩、2倭館、3江戸藩邸の三ヵ所で保管がなされていた。もとあるから、その内容は対朝鮮関係にかかわるものだけではなく、領内治政あるいは幕府や諸大名との関係記録も多く含まれている。長い間に記録類は互いに出入りを繰り返し、また他所で記録・保存されていたものの写しや控の類が作成され、別所に置かれるようになつたものも多い。やがて近代にいたり、左の図のような経路をへて、現在は七つの機関に保管されている。

※朝鮮人行列図巻(東京国立博物館所蔵)



朝鮮通信使一覧

干支 年 代 (将軍謁見の年)	使 命											
	甲子	乙未	丙午	丁巳	戊辰	己亥	庚戌	辛卯	壬戌	癸未	甲子	乙未
日本	慶長二年	元和三年	寛永二〇年	寛永二一年	寛永二二年	寛永二三年	寛永二四年	寛永二五年	寛永二六年	寛永二七年	寛永二八年	寛永二九年
朝鮮	光海君九	宣祖四〇	仁祖二	仁祖一	孝宗二	仁宗一	泰平の賀	泰平の賀	泰平の賀	泰平の賀	泰平の賀	泰平の賀
西暦	一一〇七	一一一七	一一二七	一一三六	一一四三	一一五五	一一六三	一一六四	一一六五	一一六六	一一六七	一一六八
使 命	修好	大坂平定の賀	家綱の誕生	綱吉の襲職	吉宗の襲職	家宣の襲職	六八二	六八二	六八二	六八二	六八二	五〇〇四
總人數	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右	同右
京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留	京都留

田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』(創文社)より
総人數は仲尾宏『朝鮮通信使と徳川幕府』(明石書店)を参考



慶應義塾図書館所蔵「信使記録」

朝鮮通信使と通信使記録

朝鮮通信使とは、朝鮮国王が日本の將軍に派遣した外交使節団のこと。江戸時代は十二回来日した。そのほとんどが新將軍の襲職に際して派遣されたため「御代わりの信使」とも称される。規模にして三百五百名からなる大使節団が、国書と贈物を携え、朝鮮の漢城(ソウル)から釜山へ、さらに対馬から江戸までの行程を五ヶ月~八ヶ月を費やして往復した。

この一大使節団の来聘は「鎖国」時代といわれる近世にあつて、徳川將軍の国際的地位を検証する大イベントとして、大きな政治的意義を持つていた。さらに正使・副使・從事官の三使官以下、隨員には朝鮮の一流の学者・書家・画家・医者・通訳等が選ばれており、それはまさに来日した最大の文化使節団で、日本に大陸の文化や文物を伝えてくれた大動脈の役割を果たした。今も岡山県牛窓に残る唐子踊りに見られるように、民衆にとつても珍しい異国の文物に接した影響ははかりしなかつた。

この大イベントを一任された対馬藩の宗家は、朝鮮通信使に関する克明な『通信使記録』を残した。そこには、通信使來聘の経緯たとえば前將軍の薨去と現將軍の襲職、通信使の来日要請、さらに決定した使節隨員の官職・姓名等々、あるいは一行に対する各藩の対応の詳細、饗応の仕方、江戸城登城の次第、日光東照宮参詣、各地で詠じられた詩文等文化交流の様子、両国の贈答品、通信使帰國後のお礼の使節派遣などが記されている。

『通信使記録』は、現在慶應義塾図書館本を中心とした欠本をこれまで閲覧が困難であった大韓民国の国史編纂委員会の所蔵本、および東京国立博物館の所蔵本で補い、『通信使記録』の完全版を公刊するものである。

回答兼刷還使
(外交体制の変革)
通信使(外交体制の変革)
同右

備考

対馬宗家文書 第Ⅰ期 朝鮮通信使記録

リール 配分一覧

■ = 第1回配本全47リール
■ = 第2回配本全50リール
■ = 第3回配本全40リール



慶應義塾図書館所蔵の「信使記録」

年号	慶應義塾図書館所蔵分		東京国立博物館所蔵分		大韓民国国史編纂委員会所蔵分	
	リール数	原本冊数	リール数	原本冊数	リール数	原本冊数
第1回 回答兼刷還使 慶長12(1607)年				1冊		1冊
第2回 回答兼刷還使 元和3(1617)年				—		—
第3回 回答兼刷還使 寛永元(1624)年				2冊		1冊
第4回 通信使 寛永13(1636)年				8冊		2冊
第5回 通信使 寛永20(1643)年				12冊		1冊
第6回 通信使 明暦元(1655)年		※()内は合本・ 分冊状態での冊数	1リール	28冊		40冊
第7回 通信使 天和2(1682)年	3リール	38冊(17冊)	1リール	3冊	3リール	54冊
第8回 通信使 正徳元(1711)年	18リール	133冊(145冊)	1リール	10冊	6リール	74冊
第9回 通信使 享保4(1719)年	8リール	116冊(46冊)	1リール	7冊	12リール	88冊
第10回 通信使 延享5(1748)年	9リール	94冊(59冊)	1リール	9冊	13リール	143冊
第11回 通信使 宝曆14(1764)年	9リール	123冊(48冊)	1リール	1冊	6リール	92冊
第12回 通信使 文化8(1811)年	15リール	186冊(98冊)	2リール	20冊	12リール	84冊
文化以前・来日以外	—	—	—	—	8リール	52冊
天保以降・幕末期	1リール	6冊(5冊)	2リール	17冊		
その他(年代混交)	1リール	5冊(2冊)	—	—	—	—
年代未詳(雑集)	1リール	14冊(2冊)	—	—	1リール	15冊

膨大な対馬藩宗家文書の内、朝鮮国王が12回に亘って江戸幕府に派遣した外交使節団・朝鮮通信使の記録を初めてマイクロフィルム化。今回は慶應義塾図書館所蔵本を機軸にし、欠けている江戸時代初期の信使記録等を大韓民国国史編纂委員会の所蔵史料と、このたび改めてその存在が確認された東京国立博物館所蔵史料で補って公刊。国内外に散在している「朝鮮通信使記録」の完全版を目指す初めての試みである。

初めてのマイクロフィルム化

特色と 内容見本

※見本は全て大韓民国国史編纂委員会所蔵本



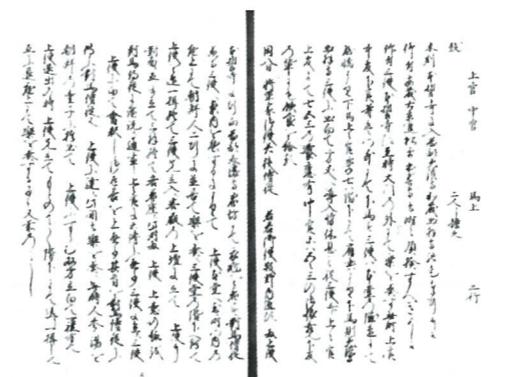
朝鮮國之勅使 紫野宿覚書（慶長12年）

近世日朝外交・貿易・文化史料の宝庫

江戸幕府に朝鮮外交を職掌する機関が存在しなかったため、宗家の「信使記録」が江戸時代の記録のすべてである。この記録は、江戸時代の政治・外交・貿易・交通史のみならず、比較文化史や、服飾・食物・文学・思想・美術・音楽史等、第一級の文化史料でもある。海外では、韓国をはじめ、アメリカなどの日本・朝鮮史研究者たちの関心度が非常に高い史料である。

大韓民国国史編纂委員会所蔵の史料を初収録

大韓民国国史編纂委員会の所蔵史料が展示等のため一時的に貸し出されることはあったが、その所蔵史料を出版することが認められたのは、今回が初めての快挙である。戦前に宗家から朝鮮総督府に流出した文書・約3万点の内、特に貴重な「通信使記録」647点を収録。これにより、韓国国内においてさえ閲覧制限のあった江戸時代初期の記録を含む史料等が簡単に見られるようになり、歴界の研究進展に果たす役割は極めて大きい。



信使來聘記（寛永13年）



信使來聘記（寛永13年）

膨大な史料をコンパクトに、かつ廉価に 収録

膨大な史料をコンパクトに、かつ廉価に提供できるよう16ミリマイクロフィルムにて刊行。35ミリの2倍のコマ数が収録できるため、容積も $\frac{1}{4}$ となり、収納スペースもとりません。また、見たい史料をすばやく引き出せる自動検索可能なカセット（国立国会図書館・国立公文書館等採用）への転換も承ります。ご希望の方は、ご注文の際お申し付け下さい。（詳細につきましては、弊社営業部までお気軽にお問い合わせ下さい。）

信使來聘記（寛永20年）

対馬宗家文書 ●第Ⅰ期●

朝鮮通信使記録

監修：田代和生（慶應義塾大学名誉教授）/李 薫（元大韓民國國史編纂委員會研究委員）
現東北亞歷史財團首席研究員

全137リール（16mmポジティブルロール）+別冊3

■ 摘定価：本体5,934,000円+税 ISBN978-4-89714-417-7 C3821

第1回配本

卷 数 全47リール+別冊上
収 錄 【慶應義塾図書館所蔵】天和～宝暦信使記録
定 価 摘本体1,974,000円 ISBN978-4-89714-418-4 C3821

第2回配本

卷 数 全50リール+別冊中
収 錄 【慶應義塾図書館所蔵】文化信使記録／天保以降幕末期ほか
【東京国立博物館所蔵】慶長～文化信使記録ほか
【大韓民國國史編纂委員會所蔵】慶長～享保信使記録
定 価 摘本体1,980,000円 ISBN978-4-89714-419-1 C3821

第3回配本

卷 数 全40リール+別冊下
収 錄 【大韓民國國史編纂委員會所蔵】延享・宝暦・文化・幕末期信使記録
定 価 摘本体1,980,000円 ISBN978-4-89714-867-0 C3821

対馬宗家文書

〔第Ⅱ期〕江戸藩邸毎日記

揃本体 4,500,000円

●卷数：16ミリポジティブルロール 96リール

●原本所蔵機関：東京大学史料編纂所ほか

〔第Ⅲ期〕倭館館守日記・裁判記録

揃本体 5,625,000円

●卷数：16ミリポジティブルロール 120リール

●原本所蔵機関：国立国会図書館ほか

特にお薦めしたい方

日本近世史、社会経済史、朝鮮史、日朝関係史、東アジア史、外交史、比較文化史、思想・文学・美術・音楽など各種の文化史、情報・交通史、政治史などの研究者および研究機関。図書館。政府関係団体。

表紙図版：江戸図屏風（国立歴史民俗博物館所蔵）

ゆまに書房

〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
Tel. 03(5296)0491
Fax. 03(5296)0493
<http://www.yuman.co.jp/>

総発売元

株式会社 紀伊國屋書店
営業総本部